

氏 名 高松 亮太  
学位の種類 博士(文学)  
報告番号 乙第299号  
学位授与年月日 2014年3月31日  
学位授与の要件 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)  
第4条第2項該当  
学位論文題目 和学者上田秋成の研究  
審査委員 (主査)水谷 隆之  
加藤 睦  
長島 弘明 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

## I 論文内容の要旨

### 論文名…和学者上田秋成の研究

#### (1) 論文構成

##### 序章

#### 第一部 上田秋成〈前夜〉——真淵学の時代——

第一章 真淵紀行『西帰』の生成をめぐって 付、『冠辞考』成立管見

第二章 真淵紀行の伝播

第三章 真淵評注本系統『金槐和歌集』伝本考 ——上方における流布を中心に——

#### 第二部 上田秋成の和学活動

第一章 上田秋成の万葉集講義 ——林鮎主の講義聴聞をめぐって——

第二章 上田秋成の実朝・宗武をめぐる活動

第三章 上田秋成と蘆庵社中 ——雅交を論じて『金砂』に及ぶ——

#### 第三部 上田秋成の歌学

第一章 「目ひとつの神」の和歌史観

第二章 「和歌無師匠」考 ——近世期の展開と秋成の師弟観——

#### 第四部 上田秋成とその周辺

第一章 林鮎主の和学活動と交流

第二章 林鮎主年譜考

第三章 山地介寿の在洛時代

第四章 荒木田久老の上洛 ——『万葉考槻乃落葉四之巻解』の周辺——

#### 資料編

第一章 真淵自筆草稿『西かへり』翻刻と影印

第二章 上田秋成筆〔宇万伎三十年忌歌巻〕翻刻と影印

#### 終章

#### 初出一覧

## (2) 論文の内容要旨

第一部「上田秋成〈前夜〉—真淵学の時代—」では、秋成の師である加藤宇万伎の師にして、近世中後期の和学に多大な影響を与えた賀茂真淵の和学について、特にその受容の観点から論じ、秋成和学の背景を描く。第一章「真淵紀行『西帰』の生成をめぐって」では、真淵の『西帰』の生成過程を検討するとともに、『冠辞考』成立時期を再検討し、元文元(1736)年頃には草稿が成っていたとする。第二章「真淵紀行の伝播」では、真淵紀行が伝写されていく様相を明らかにしたうえで、後代の紀行文に及ぼした影響を論じる。第三章「真淵評注本系統『金槐和歌集』伝本考—上方における流布を中心に—」は、七十点以上の伝本が確認されている諸本を整理・分類するとともに、写本が伝播する過程で変容していくさまを追い、特に秋成周辺を含めた上方での受容を明らかにする。

第二部「上田秋成の和学活動」では、和学者・歌人としての上田秋成の諸活動について、その意義や近世中後期の文壇における位置付けをする。第一章「上田秋成の万葉集講義—林鮎主の講義聴聞をめぐって—」では、秋成説が書き入れられた寛永版本の分析を通して、門人林鮎主の講義聴聞の実態を明らかにする。第二章「上田秋成の実朝・宗武をめぐる活動」では、源実朝と田安宗武をめぐる秋成の活動とその文学史的・文壇史的な意義に言及する。第三章「上田秋成と蘆庵社中—雅交を論じて『金砂』に及ぶ—」では、特に秋成と大坂の蘆庵社中との雅交を示したうえで、秋成文学生成の基盤に蘆庵社中との交流があったことを指摘する。

第三部「上田秋成の歌学」では、『春雨物語』『目ひとつの神』を中心に、従来指摘されてきた蘆庵歌論との関係以外の、近世歌学の流れと秋成歌論との関わりについて論じる。第一章「『目ひとつの神』の和歌史観」では、「目ひとつの神」で展開される歌論が真淵流和学者たちの歌論と相即することを論じる。第二章「『和歌無師匠』考—近世期の展開と秋成の師弟観—」では、『詠歌大概』の「和歌無師匠」という言辭の近世期における解釈の流れを押さえたうえで、秋成が抱いていた師弟観を炙り出す。

第四部「上田秋成とその周辺」では、秋成門人や秋成と同時代を生きた和学者たちが、秋成と如何に関わり、上方において如何なる活動を行っていたのかを検討する。第一章「林鮎主の和学活動と交流」では、京都の秋成門人として多彩な和学活動を展開していた林鮎主の和学活動と和学をめぐる交流を追い、京都文壇に位置付ける。第二章「林鮎主年譜考」では、味噌商にして歌人・和学者・狂歌師・蔵書家といった様々な顔を持つ林鮎主の活動を年譜形式で綴り、多才な文人としての姿を描き出す。第三章「山地介寿の在洛時代」では、土佐藩士にして宣長・秋成に学んだ和学者山地介寿の活動を調査し、秋成の人的交流の具体像を示す。第四章「荒木田久老の上洛—『万葉考槻乃落葉四之巻解』の周辺—」では、久老の上洛時の万葉講義と、『万葉考槻乃落葉四之巻解』の成立過程を、特に秋成説受容の観点から検討する。最後に資料編として第一部第一章で紹介した賀茂真淵自筆草稿『西かへり』（個人蔵）の翻刻と影印を（第一章）、第二部第三章で紹介した上田秋成筆〔宇万伎三十年忌歌巻〕（個人蔵）の翻刻と影印を付す。

## Ⅱ 審査結果の要旨

本論文は、上田秋成（1734-1809）の和学者・歌人としての側面に着目し、周辺の文人たちとの交流関係を追い、秋成の和学を当時の上方文壇の中に新たに位置づけたものである。

本論文の成果としてまず特筆すべきは、複数の新資料の紹介である。賀茂真淵の紀行文『西かへり』の推敲過程を示す、新出の真淵自筆草稿のほか、林鮎主が秋成説を書き入れた『万葉集』（国文学研究資料館蔵）を見出し、さらに秋成の師、加藤宇万伎の三十年忌追善歌会の記録を「宇万伎三十年忌歌巻」と題して紹介するなど、秋成の和学に関連する重要な資料が新たに報告されている。もっとも、本論文の意義はそれら新資料の紹介のみにあるのではない。新資料をふくむ数多の資料調査を軸に、当時の文人たちの活動や交流のさまを浮き彫りにした点が注目される。

第一部は、秋成の学問の基盤となった真淵の著作についての研究である。真淵紀行文や真淵評注本『金槐和歌集』の諸本を調査、整理したうえで、それらの伝写の過程を追い、真淵説の伝播のさま、後代への影響の大きさを具体的に指摘する。

第二部では、秋成説書入本『万葉集』の筆者を林鮎主と特定し、従来等閑視されていた、京の味噌商にして秋成門人であった林鮎主の、和学者、狂歌師、書肆、蔵書家としての多岐にわたる活動を追うとともに、大坂の蘆庵社中など秋成周辺の人的交流を丹念に跡付ける。

第三部では、『春雨物語』『目ひとつの神』に披瀝される秋成の歌論が、真淵や同時代の和学者たちの歌論と不可分の関係にあったことを論じる。さらに、『詠歌大概』の「和歌無師匠」という記述の、近世期における解釈の変遷を整理したうえで、「目ひとつの神」に見出される秋成の師弟観に言及する。いまだ部分的ではあるものの、秋成の歌学を歌論史のなかに置いて相対化し、分析しようとの試みである。

第四部では、林鮎主の年譜を記してその文事の全容をはじめて示す。また、秋成と山地介寿の交流、荒木田久老の上洛時の万葉集講義とその秋成説との関係を論じる。当時の文人の人的交流を丹念に追い、秋成の文事をその内外から多角的に論じたものである。

諸本の書承関係や、そこからうかがわれる当時の文人たちの人的交流についての指摘はいずれも実証的かつ正確な分析に裏付けられている。そして広範な資料調査に基づく本論文の成果は、真淵著『冠辞考』の成立時期をも新たに推定するなど、秋成研究の範囲をこえ、従来の研究の再確認や修正にも及んでいる。書写関係を追ううえでは、真淵や秋成の注釈のどういった解釈が注目され受容されたのかなど、各学問の精緻な内容分析が今後の課題となろうが、秋成研究の基礎を固め、新たな研究の可能性を拓いた本論文は、研究史上高く評価できるものである。